The Japanese Association for Behavior Analysis(JABA)

P1-21　日本行動分析学会　第24回年次大会
(2006年9月1日～3日・関西学院大学)

言語レスポンデント条件づけの予備的検討：評価的反応の形成と選好への転移

A preliminary study of verbal respondent conditioning: acquisition of evaluative responses and transfer of preferences

恒松 伸

Shin TSUNEMATSU

(立命館大学文学部 非常勤講師)

Part-time Lecturer, Faculty of Letters, Ritsumeikan University

言語レスポンデント条件づけの標準的な手続きでは、単語をUS、無意味綴りをCSとし、単語により誘発される正または負の評価的な反応が、それと近接して提示される無意味綴りにおいても誘発されるかを調べる。この条件づけの最初の研究は Staats & Staats (1957) によって報告された。大学生を対象とした彼らの研究では、正、中立、負の評価的な反応を誘発する合計 108 個の単語と6種類の無意味綴りが1つずつ対提示された。その終了後に、各無意味綴りに対して、どの程度の評価的な反応が生じるかを調べるために、セマンティック・ディファレンシャル (SD) 尺度を用いて良いから悪いまでの7段階で評定させた。その結果、beauty や win などの正の評価反応を誘発する単語と対提示された無意味綴り (YOF) の評価点と thief や sad などの負の評価反応を誘発する単語と対提示された無意味綴り (XEH) の評価点との間に統計的な有意差が見出され、これにより言語レスポンデント条件づけの成立が確認された。

本研究では、Staats & Staats (1957) と同様の手続きを用いて、言語レスポンデント条件づけの効果が再現できるか、さらに、条件づけが成立した場合、それが仮想の清涼飲料水の選好へ転移するかを調べることを目的とした。なお、言語レスポンデント条件づけにおいて、単語により誘発される正負の評価的な反応は生得性ではなく学習性のレスポンデント行動であることから、以下では単語を CS1 と、またそれと対提示された無意味綴りを CS2 と位置づけることにする。

【方法】〔参加者〕集団実験場面において大学生 95 名 (平均年齢 19 歳) が参加した。このうち、実験の目的や刺激間の随伴関係に気づいていたと判断された8名を除く 87 名を以下のデータ分析の対象とした。〔材料〕条件づけの単語 (CS1) として Staats & Staats (1957) で使用された 108 個の単語のうち 54 個の単語を日本語に訳したものを使用した。54 個の単語は、正、中立、負の3種類の評価的な反応を誘発する 18 個ずつの単語で構成された。また、これらの正、中立、負の単語と対提示される無意味綴り (CS2) として、QHX、ZDL、RJG を用いた。無意味綴りは視覚刺激としてスクリーン上に、単語は聴覚刺激として実験者の口頭により提示された。さらに、各無意味綴りに対する条件づけの程度と清涼飲料水の選好への転移を測定するための記録用紙を用意した。前者では、良いから悪いまでの7段階尺度が、後者では、紙コップに各無意味綴りがプリントされた絵が、使用された。

〔手続き〕1セッションは 54 試行より構成され、1試行につき1個の無意味綴り (CS2) と1個の単語 (CS1) が対提示された。各試行において、まず無意味綴りがスクリーン上に2秒間提示された。その提示終了直後に、実験者の口頭により、単語が1秒以内に提示された。試行間間隔は2秒であった。単語が提示された直後に、同じ単語を声に出して1度だけ繰り返すことが、参加者に要求された。条件づけ終了後に、記録用紙を用いて、各無意味綴りに対する条件づけの程度と選好への転移を測定した。後者では、3つの清涼飲料水に対して、最初に飲みたいものから順に1、2、3の順位をつけることが求められた。その他の詳細は Staats & Staats (1957) の手続きに準じた。

【結果と考察】

各参加者の7段階尺度の評定結果に対して、最も良いから最も悪いまでのイメージの各段階に、順に7点から1点を与えた。図1は、各無意味綴りに対する評価点の平均を示したものである。分散分析と多重比較の結果より、平均値は RJG、ZDL、QHX の順に有意に大きくなり、言語レスポンデント条件づけの成立が確認された。さらに、個人レベルで条件づけの効果がみられた 26 名を対象に、清涼飲料水の選好順位を符号化順位検定で分析した結果、正に条件づけられた無意味綴り (QHX) の清涼飲料水が最も好まれ、負に条件づけられた無意味綴り (RJG) のそれが最も好まれないことが示された。同種の無意味綴りと単語を用いた Barnes-Holmes et al. (2000) は、条件性弁別課題と機能的等価性のテストを行い、正または負のオペラント条件づけの結果が、実在する清涼飲料水に対する選好に転移することを報告している。本実験の結果は、レスポンデント条件づけを用いた場合も、選好転移の現象がみられる可能性を示唆した。

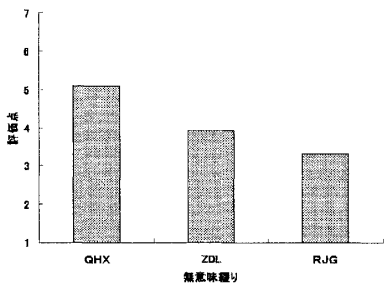

図1 各無意味綴りに対する7段階尺度の平均評価点(N=87)

NII-Electronic Library Service